



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	とある地域の超萌観光(ツーリズム)
Author(s)	岡本, 健
Citation	まほら, 70, 46-47
Issue Date	2012-01-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/48240">https://hdl.handle.net/2115/48240</a>
Type	journal article
File Information	mahora_2012.pdf



## とある地域の超萌観光

岡本 健

秋の関東、荘厳なたたずまいの鷲宮神社の鳥居の前で神輿が担がれている。その掛け声は、「萌えっ！萌えっ！」…空耳かと思った。「萌え？そーれっ！の間違いでは？」。いや、ここではこれが正しい。そう、ここは埼玉県久喜市にある鷲宮神社、アニメ『らき☆すた』の舞台として描かれ、ファンにとっての「聖地」となり、アニメファンが「聖地巡礼」のために訪れる地域なのである。「萌え」とは、アニメファン独特の表現であり、「アニメに出てくるキャラクターに対する溢れんばかりの愛情」を表現する言葉だと思っていただければ良い。



地元のお祭りである土師祭(はじさい)で担がれる「らき☆すた神輿」  
(2011年9月4日筆者撮影)

さて、こうした現象、映画やドラマ、小説、アニメ、漫画などの作品の舞台になったところが観光地になる「メディア観光」は大して珍しいことではない。しかし、私がフィールドワークを実施し、研究している「アニメ聖地巡礼」は、これまでの「メディア

観光」とは一味も二味も違うのである。

まず、一番の違いは情報流通のあり方だ。通常のメディア観光であれば、メディア事業者や観光産業、行政などによって大規模なキャンペーンがうたれるのが普通である。しかし、アニメ聖地巡礼の場合、そうしたものは存在しない。では情報が無いではないか。

実際に聖地巡礼している人を見てみると、何かが印刷された紙を手にしたり、携帯パソコンやスマートフォンとにらめっこをしたりしながら歩いている。「どういう情報を得てアニメの聖地巡礼をしているのですか？」聞いてみると、その情報源はインターネットの個人のブログやホームページだそうだ。それを印刷して持ち歩いたり、携帯端末で確認したりしているということだ。なるほど！「じゃあ、このブログを書いた人はどうしてこの場所が聖地だと知っているのでしょうか？」、皆さん「さあ…」。う～む、なぜだろう？何度かフィールドワークを繰り返すうちに、自らを「舞台探訪者」と名乗る方に出会った。アニメの舞台となった場所を自分で探し出し、写真に撮り、情報をインターネット上で発信する人だ。「どのように舞台を探し出すのですか？」と聞くと、とても詳しく説明してくれた。目立つランドマークが描き込まれていればわかりやすい。一か所舞台を見つけ出せば、多くはその周辺に固まっているので、あとはひたすら歩き回って探すそうだ。場合によっては地形図まで持ち出し、描かれている山の角度や、川や集落の位置などから場所を特定していくのだという。自分が研究者として恥ずかしくなってしまうくらいの徹底ぶりである。「先生、って呼ばせていただいてもよろしいでしょうか…」。

次に大きな違いは、観光資源の協働構築である。具体的にはどういうことか？たとえば、鷲宮神社の絵馬掛け所である。鷲宮神社の絵馬掛け所には、痛絵馬(いたえま)がたくさんかかっている。痛絵馬とは何か？アニメの絵が描かれた絵馬のことである。一人一人がさまざまな工夫を凝らした絵馬を絵馬掛け所に掛けていく。たちまちアニメ絵の展覧会場に早変わりだ。これが、鷲宮神社を訪れる人々の観光資源となっている。



鷲宮神社の絵馬掛け所の一部。同じ人が何度も参拝して掛けていく場合もある。  
(2008年5月29日筆者撮影)

もう一つ紹介しよう。冒頭に紹介した神輿である。2008年に初めて登場したこの神輿は、多くの人の手によって成っている。まず発案者は、ファンと普段からよく話をしていた地元のおじいさんである。制作には、台座部分に地域の祭りに関わる住民、上部の絵はアニメファンが描いた。下段部分の絵は『らき☆すた』の著作権を持つ角川書店によるイラストだ。この神輿は毎年9月に出来るのであるが、2010年9月には、絵の部分に新たな描き手が参加する。なんと神輿発案者のおじいさんが萌えアニメの絵を描いてしまったのだ！ファンからも大好評だった。2011年9月には、『らき☆すた』の原作者までイラスト描きに加わった。つまり、神輿の絵の部分には、アニメファン、地域住民、著作権者そして、作家までもが関わっているのである。トップダウンで権威を持った誰かが作るのではなく、様々な人の手によって作り上げられていることがわかる。しかも、この手作り神輿、海を越えて上海万博でまで担がれたのである。

さて、ここまで読み進められた読者の中には、「そんなことをして地域の人は苦情を言わないのか？」と思われる方がいらっしゃるかもしれない。ところが、心配をよそに、町民の中にはむしろこの状況を面白がり、盛んにファンと交流している人も多いと聞く。アニメファンの中には、引っ込み思案な人もいるのだが、「鷲宮の皆さんや、ここに集

まってくるファンは、あたたかくて、とても気持ちよく話せる」と言って、とても良い笑顔。

こうした、人と人があたたかくつながる観光空間が生まれる推進力は、旅人や地域の人々それぞれの「想い」である。個人の「想い」が地域振興につながり、大きな力に変わっていく。そんな「新しい観光」の息吹を感じずにはられない。